

【寄稿】国際経済学科海外特別研修でラオス、タイへ

「目からウロコ」の体験 ラオスへの関心高まる

経済学部国際経済学科が昨年度からスタートした「海外特別研修I・II・III」(飯沼健子助教授担当)と「NGO論I・II・III」(狐崎知己教授担当)は、今夏、初めての海外研修、海外NGO活動が実施された。両科目とも、受講生は5人。「海外特別研修」でラオス、タイを訪問した竹本美帆さん(2年)の体験記を紹介しよう。

竹本美帆(経済2)

8月2日から10日間、「海外特別研修II」の現地研修として、ラオス、タイに行ってきました。この経験は、まさに「百聞は一見にしかず」ということわざそのものでした。

私たちは、前期の授業で、ラオスの歴史・経済・文化・社会問題等を調べ、考察し、いくつかの疑問点をあげました。研修ではその答えを、五感を使って見いだすことができました。中でも、国際機関の職員や専門家の方々から伺ったお話やデータは、目からウロコが落ちる貴重なものでした。

ラオス国立大学のラオス日本センターで交流したラオス人学生とは、一緒に講義を受けたり、食事をしたり、市内の名所を巡るなどして友情を深めました。

ドアなし風呂場で 巻き布入浴も！

ペンマイギャラリーという伝統織物工房に一泊ホームステイをしました。ここでは、若者が住み込みで働いており、機織りを体験させてくれたばかりでなく、夜中まで話し込みました。扉がない風呂場で、巻き布をして水をかぶった入浴も、楽しい思い出です。

さらに、入国審査並みにパスポートを見せてタイの国連アジア太平洋経済社会委員会事務局に入り、お話を伺えたことは、身に余る貴重な経験でした。

帰国後、ますますラオスへの興味がわいて熱が冷めません。後期からは、報告書作成に取りかかっています。疑問がわけば、すぐにラオスの大学生や知り合いにEメールで質問をします。お世話になった両国の人々を思うと、手を抜くことは出来ません。研修での10日間のよう、中身の詰まった報告書を完成させたいと思います。

タイとラオスの国境を流れるメコン川には、外国援助で架けられた友好橋があります。私も将来は、国と国、人と人とを結んで平和をもたらす、そんな友好橋のような人材になりたいです。

私たちのために準備を進めて下さった大学関係者の方々、深い理解で送り出してくれた家族、広い人脈で貴重な研修に導いて下さった飯沼先生に深く感謝しています。

【寄稿】海外研修・国際交流奨励制度を利用して

今年度、学生部の前期海外研修・国際交流奨励生の二人から届いた体験記を紹介しよう。

幼児教育に高い満足度 —カナダのデイケアセンター訪問

小林緑（文2）

教育に関心があり、教育に関する授業をいくつか履修しています。カナダの幼児教育に興味を持ち、この夏カナダのアルバータ州カルガリーのデイケアセンター（日本の保育園に相当）を訪問する機会に恵まれました。

カルガリーは冬季オリンピックが開催された人口100万の中都市。現在土地開発が盛んに行われ、世界一拡大している都市としてギネスブックに載せられているほどです。カナダの別の州から引っ越してくる人をはじめ、他国からの移民も大勢います。そのような状況のためデイケアに入れない子供たち（待機児）がいるのが現状です。

今回、四つのデイケアを訪問しましたが、そこで働く教育者にインタビューしたり、親にご協力いただき、「満足度」に関するアンケートに答えていただきました。「清潔感があり、良いスタッフがいて、さまざまなアクティビティーがあるので大変満足している」という答えがたくさん返ってきました。先生方に移民の子供たちを受け持つことに関して意見を求めると、ほとんどが「さまざまな文化を背景に持つ子供たちを担当することは素晴らしいことだ」といったポジティブな反応でした。言葉の問題が全くないとはいえませんが、子供は小さければ小さいほど言語を習得するのが早いので、すぐに現地の生活に馴染むことができます。先生たちも移民が多く、英語と母語のバイリンガルでした。

貴重な写真撮影も

ディレクターに子供たちの写真を撮って良いかと聞いてみると、親の許可が必要だと言われました。何の目的で撮るのかを書いて署名をもらわないといけないのだそうです。100人ほどの子供たちが通っているのでとても不可能のように思いましたが、再びデイケアに行った時には、私を含めて、子供たちと一緒に撮ってもらえるか頼んだところ「OK」と引き受けてくれました。ここに載せている写真は、貴重なものです。

印象深かったことは、子供たちも歓迎してくれたことです。子供たちは私を誰かの母親だと思ったのでしょうか。何人かが“Whose mom are you?”と尋ねてきました。バージニアという4歳の女の子もそう聞いて抱きつき、ずっと離れようとしません。その子が庭に出て遊ぶ時、先生が「外に連れていってくれる？ 面倒みてあげられるわよね」と言いました。初めて会ったばかりの部外者の私にも気さくに接し、信頼してくれたのでうれしく感じました。

広大なカナダは人々も寛大で、デイケア訪問を通して大勢の人にお会いし、貴重な経験をさせていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

ルネサンス運動とメディチ家の役割 その貢献度を調査

渡辺奈美（文4）

私は江戸文化のゼミナールに所属しており、今年6月、イタリアのベネチア大学とリアルタイムでのネットワーク共同授業を経験しました。イタリアの学生が日本の文化を一生懸命吸収しようとしている姿をみて、イタリアについてもっと知りたい！と思うようになったのが、この制度を利用したきっかけです。

そこで、イタリアのフィレンツェで興った、芸術上および思想上の革新運動であるルネサンスを取り上げたいと思い、その運動にパトロンであるメディチ家がどのくらい貢献をしたのか調査してみることにしました。

実際現地に行ってみて気付いたことは、フィレンツェの街並みは、ルネサンスの時代とほとんど変わらないということです。それは昔の地図と今の街並みを比べれば、すぐに分かります。そしてそこはメディチ家の軌跡で溢れていました。古くて黒い石の建物にはメディチ家の紋章がいくつも見受けられ、建物の中には彼らの自画像、絵画、彫刻などのコレクション、彼らの邸宅、教会やお墓などは街の中心に存在していまし

た。

ベネチア大生に現地の案内を

今回、ベネチア大学の学生に現地を一日案内してもらい、さらにホームステイする機会も得ました。普通の観光客ができないコアなイタリアを味わうことができたし、お互いの文化に興味を持っていたので非常に有意義な時間を過ごすことができました。彼女にルネサンスにおける考えを聞いたことも勉強になりました。

ルネサンスが興ったのはおよそ800年前のことですが、神中心の考えから人間中心の考えへの転換期です。簡単そうに聞こえますが、この発想こそが世界を動かすきっかけになりました。その運動に力を貸したメディチ家はやはり偉大であると言わざるを得ません。彼らが自分たちの財産で芸術家を育て上げ、芸術を収集し、作品ばかりでなく人間にあらゆる考えを提起させ、今後の課題を後世に残していったのだと思います。その意味でメディチ家はルネサンスの発展にはなくてはならない存在であることは、言うまでもありません。

この調査でメディチ家は、私にまでさらなる課題と目標を与えてくれたようです。これからも両方の文化についてさらに考えていきたいと思います。そしてこんな思いができるのは、力の及ばない私に、重要な時間と苦勞をかけて下さった方々のお陰です。この場を借りて、お礼を言わせていただきます。本当にありがとうございました。私も何かすばらしい作品を残せたらいいのですが…。